

■開催概要

- シリーズ名称 : 2019 鈴鹿クラブマンレースRound 6
- 主催 : オートスポーツクラブアツタ(AASC)、鈴鹿モータースポーツクラブ(SMSC)
- 協力 : ARC、ARCN、KRHC、OCCK、チーム淀
- 競技 : JAF公認・準国内格式 公認番号2019-2005
- 会場 : 鈴鹿サーキット 国際レーシングコース 東コース(2.243km)
- 開催レース : 総参加台数/104台
 - フォーミュラEnjoy/25台
 - FFチャレンジ/15台
 - クラブマンスポーツ/23台
 - FIT 1.5 Challenge Cup/15台
 - RS・CS2クラス/10台
 - スーパーFJ/16台
- 開催日 : 2019年10月20日(日)
- 天候/路面 : 晴/ドライ

■次回レース開催概要

- シリーズ名称 : 2019 鈴鹿クラブマンレース Final Round
- 開催日 : 2019年12月7日(土)・8日(日)
- 主催 : 京都レーシングハイブリッドクラブ(KRHC)・鈴鹿モータースポーツクラブ(SMSC)
- 会場 : 鈴鹿サーキット 国際レーシングコース フルコース(5.807km)
- 開催クラス : F4、スーパーFJ(S-FJ&F4日本一決定戦)、FIT 1.5 Challenge Cup、クラブマンスポーツ、FFチャレンジ、CS2・RS(混走)、フォーミュラEnjoy

秋晴れのレース日和となった東コース。 最終戦を前にシリーズチャンピオン争いが白熱!

10月13日に行われた「F1日本グランプリ」の余韻も残る、鈴鹿サーキット 国際レーシングコース。シーズン最終戦となる「Final Round」を目前に控えた「鈴鹿クラブマンレースRd6」が、東コースを舞台にして10月20日に開催された。

多くのドライバーが練習走行に充てていた前日の19日(土)は生憎の雨。ウェットコンディションでの練習を余儀なくされていた。しかし一転して、レース本番の20日(日)は朝から秋晴れのレース日和となった。高コンディションの予選は、RS-CS2クラスにおいてレース中に2度の赤旗中断こそあったものの、午後からの決勝ヒートはそれぞれオンタイムで進行、白熱のレースが繰り広げられた。

例えば、澤龍之介が早々とシリーズチャンピオンの座を手中にしているスーパーFJクラス。この日の最終戦は澤が不在で行われたが、一つでもシリーズランキング上位の座に食い込もうと白熱したレース展開が披露された。また、この日も勝利して連勝記録を伸ばしたFE2クラスの大崎達也だが、次の最終戦でも勝利して、シーズン全勝という栄誉に輝くことができるのか。この他、RS・CS2クラスにおいては次戦で決まるシリーズチャンピオンの行方はいかに!? など、注目が集まるところだ。

東コースでのショートコースバトルで火花を散らした各ドライバーたち。早くも視線は12月、フルコースでの最終戦を見据えている。



■フォーミュラEnjoy Class

FE2の大崎達也がホールショットを奪う好発進を決めると、FE1は12番グリッドスタートの上野大哲がクラストップとなる。序盤で上位を走るドライバーにドライビングスルーペナルティが与えられたことで大崎は単独走行となる。FE1の上野も常に安定した走りでクラス優勝となった。

【FE1】

クラス1位は12番グリッドの上野大哲だ。上野は素晴らしい走りでFE2のマシン数台を抜き去り、徐々に順位を上げていく。11周目で自己ベストをマークするなど、最後まで安定した走りでそのまま逃げ切りに成功。クラス2位は宝閣善樹、3位は富永明のオーダーという結果になった。

【FE2】

大崎達也、堀田誠、辰巳秀一のトップ3でオープニングラップを終える。大崎のリードが大きくなってくると、上位を走る堀田、辰巳が反則スタートによりドライビングスルーペナルティを与えられてしまう。これで単独となった大崎に対して、2番手争いは7台にまで膨れ上がる。レースは大崎がトップチェッカー、激しい2番手争いは今田信宏が制した。



レース序盤で総合上位を走るFE2の数台にドライビングスルーペナルティが与えられたことで、#73大崎が終始リードを保った

■フォーミュラEnjoy Class



■フォーミュラEnjoy (FE1) 仮表彰式 FE1クラスの優勝は上野大哲。クラス2位の宝間善樹らとは大差をつけて勝利した



■フォーミュラEnjoy (FE2) 仮表彰式 FE2クラスは大崎達也の連勝がさらに伸びることに。最終戦で有終の美を飾りたいところだ

■FFチャレンジClass

ポールポジションは鶴口裕太だが、2番グリッドの林陽介がホールショットを奪う。するとトップに立った林を大森和也、鶴口が追う展開になる。だが、トップを走っていた林は序盤で痛恨のコースアウトを喫してしまう。代わってトップに立った大森を、鶴口が猛追。

さらに3番手を走る亀田清志を林大輔、神原聖一らが追いかけることになり、3番手争いのバトルがヒートアップしてくる。レースは序盤で主導権を握った大森が鶴口の猛追をしのいで逃げ切ることになり、林を抑えた亀田が3位表彰台を獲得した。



鶴口裕太はポールポジションを獲得したものの、序盤でやや順位を落としてしまったことが悔やまれる



シャンパンファイトもレース同様、激しいものに。大森和也を中心として3選手にシャンパンが降り注いだ

■クラブマンスポーツClass

八木智がポールポジションから発進するが、オープニングラップの1コーナーを先頭で立ち上がってきたのは伊藤直登だ。上位の混戦は続き、オープニングラップを終えて鍋家武がトップをキープすることになる。レースは鍋家を先頭にして、中里紀夫、そして眞田拓海がトップ3を形成する。眞田は中里をパスして鍋家に迫ると、ついにトップに立つ。12周目に差し掛かるころ、2番手の鍋家は眞田に迫り、トップ争いは2台に絞られる。序盤から順位が激しく変わるレース展開となったが、最終的には眞田がトップでチェッカーを受けた。



トップの座が複数回入れ替わった激しいレースを制したのは眞田拓海だった。写真はスターティンググリッドの眞田拓海



2位の鍋家武はオープニングラップを1位で終え、序盤では優位に立ったが…

■FIT 1.5 Challenge Cup Class

ポールポジションを獲得したのは寺西玲央だ。だが、2番グリッドの伊藤裕士がホールショットを奪うと、HIROBONがこれに続く。さらに3番手には蜂須賀清明が続き、寺西は4番手にまでドロップしてしまう。トップの伊藤は順調に周回を重ねていくが、HIROBONとの差は離れない。やがてHIROBONは13周目でテールtoノーズに持ち込むと、14周目で伊藤をパスしてトップに躍り出る。さらにHIROBONはトップに立つとレース最終盤にかけてスピードを上げていき、後続を引き離しながらそのまま逃げ切りに成功。前回レースに続いての2連勝を決めた。



寺西玲央は自身3回目のポールポジションだったが、ポールtoウィンとはならなかった



シャンパンファイトを楽しむ上位3選手。後半にHIROBONが伊藤をパスするという前回レースと似た展開になった

■RS・CS2 Class

ポールポジションを獲得した阿部博行が好スタート。RSクラスのトップとしても走行を重ねる阿部を近田直人、板津一平が追うことになる。CS2クラスは4番手を走る松本吉章がトップだ。松本を追いいたい大文字賢浩だったが、2周目で痛恨のスピンを喫してしまい、これによりCS2クラスは松本が単独走行になる。板津をパスして近田が2番手に浮上してみせるが、トップを走る阿部をとの差は大きい。CS2クラスでは川島勝彦と伊藤豊、大文字のCS2クラスの2番手争いが見られる。レースはそのまま阿部が逃げ切ってトップチェッカー。CS2クラスは松本が制した。



#18阿部博行は前回レースと同じくポールポジションを獲得。スタートからラストまで安定した走りを披露した



RSクラスは阿部博行、板津一平、近田直人が表彰台に立った。結局、阿部は一度もトップを譲らずポールtoウィンとなった

■CS2 Class



■CS2クラス仮表彰式 優勝／松本 吉章 2位／川島 勝彦 3位／大文字 賢浩

■スーパーFJ class

前回レースで早々とシリーズチャンピオンを決めた澤龍之介が不在のなか行われた最終戦。岩佐歩夢がポールポジションから順当に好スタートを決めると、2番手に中村賢明、さらに入山翔と続く。序盤で2番グリッドスタートの荒川麟がマシントラブルかビットへ戻るシーンが見られる。5周が終わるころ、上位5台はそれぞれ等間隔となり、バトルは見られない。そのまま岩佐はラップを刻んでいき、そのままフィニッシュ。2位の中村に6秒327の大差をつけて勝利。これにより岩佐はシリーズランキング2位で2019年シーズンを終えることになった。



ポールポジションを獲得した岩佐歩夢。16台のマシンがグリッドに並びレース開始となった



2019年のスーパーFJ最終戦で勝利を飾った岩佐歩夢の強さが光ったレースとなった。中村賢明、入山翔も表彰台に立った

Voice of Pick up Driver

この日、キラリと光った
ドライバーに一问一答

この日、キラリと光ったドライバー&チームに一问一答
「Voice of Pick up Driver&Team」。

CS2 Classで見事に優勝！

松本 吉章 選手(ABBEY RACING)



Q: 今日を振り返ってもらえますか。

「昨日(土曜日)の練習はウェットコンディションでした。でも、今日は晴れてドライコンディションだったので、その切り替えが難しかったですね」

Q: 決勝レースは危ない走りでした。

「後ろと離れていたなのでタイヤに負担をかけないように、冷静にラップを刻むことを意識して走りました」

Q: 勝因はどこにありますか。

「やっぱりスタートが上手くいったこと。それが大きいです」

Q: 最終戦、シリーズチャンピオンを懸けたレースになりますね。

「最終戦のフルコースは、天候に関係なく自分の得意なコースです。抜き所が多くなるのが得意な理由ですが、好きなコースで良い走りをしたいと思います」